

## 審査の結果の要旨

氏名 高岡 佑壮

他者との相互作用に基づく自己理解が苦手である自閉症スペクトラム障害（ASD）者は、社会的場面において自身の行動の制御が困難となり、多様な2次的問題を引き起こす。そこで本論文は、ASD 者が自己理解を深めて行動を制御できるよう支援する方法の検討を目的とした。論文は、先行研究を概観し、ASD 者の自己理解に関する知見の乏しさを指摘し、研究の方向性を提示する第1章、自己理解がASD 者自身の行動に与える影響を質的に検討する第2章、ASD 者が自己理解を深めるプロセスを質的に検討する第3章、自己理解を妨げる要因としての社交不安と抑うつ及び自閉症傾向の関係性を量的に分析する第4章、支援者の視点から自己理解の深まりのプロセスを検討する第5章、結果を総合的に考察し、ASD 者の自己理解を支援する社会環境の整備等を提案する第6章から構成される。

第1章では、自己理解を「自身の行動傾向及び行動により生じがちな結果に対する理解」と定義し、その深まりを「自身の行動を意図的に制御できるようになること」と位置づけ、ASD 者自身の認識を尊重した自己理解促進の方法を探索する研究方針を提示した。

第2章では、自身の特徴等について語ることができる成人期の高機能ASD 者7名を対象とし、就労場面でどのような困難に直面し、それにどう対処しているかに関しての半構造化面接を行い、ASD 者が生活上の問題に効果的に対処するための自己理解の在り方を質的に分析した。その結果、自己の得手不得手の偏りと意欲の高低に極端さがあると理解することで、行動を制御し、就労の安定を図っていることが明らかとなった。

第3章では、発達過程で自己理解を深めるプロセスを探るために成人期の高機能ASD 者25名を対象とし、他者との相互作用に焦点を当てた半構造化面接を行った。その結果、他者に関する情報を取り入れにくい障害特性を持つために他者に排斥されやすいASD 者であるが、意識して他者との交流機会を増やし、他者を参照する能力を高め、他者の言動をモニタリングすることで自分の特徴を理解していくプロセスの存在が示唆された。また、他者を参照する能力は、社交不安や抑うつによって他者との交流を避けていると向上できないことも示唆された。そこから、ASD 者の自己理解を促すためには、社交不安や抑うつを軽減させて他者参照能力を伸ばす機会を作ることが効果的であるとの仮説が生成された。

第4章では、ASD 者46名に質問紙調査を行い、障害特性である自閉症傾向よりも、対人交流を避ける社交不安が、自己理解を滞らせる抑うつに強い影響を及ぼす可能性を検討した。重回帰分析の結果、必ずしも社交不安だけが抑うつに強い影響を及ぼしているわけではなく、単純に社交不安を減じて対人交流を増やすだけでは不十分であると示唆された。

そこで第5章では知見の精緻化のため、ASD 者の支援者8名に半構造化面接を行い、支援者の視点からみた自己理解の促進プロセスを検討した。結果、支援者が個別のASD 者に適した具体的な行動指針を示す「生活の枠付け」を行い、「自分はこのように振る舞えば上手くいく人間だ」という形での自己理解の深まりを促す方法の有効性が明らかとなった。第6章では知見をまとめ、生活の枠付けを支援する社会的環境の整備の重要性を指摘した。

本論文は、苦手なりに他者を参照して自己理解を深めているASD 者のプロセスを示した上で、生活の枠付けによって自己理解の深まりを促す方法を提案したことに特に意義が認められる。よって本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断した。